

棕の道草第23回 「落ち着く場所」

黒澤さや

今まで思いもしなかったこのコロナ下の毎日、皆様はどのように歩いて句を詠んでいらっしゃるのでしょうか。

根岸に生まれ育ち結婚後は谷中に住んでおります私には、寺や墓地がかぎりなく親しいところです。

昨今は谷中、根津、千駄木を谷根千というようで、商店街が人気があるのですが、この頃の気持ちが沈みがちのときには、谷中の墓地も歩いてみられてはいかかかと思いません。なんでもないところを歩くのが好きな方には合っているところと思います。

今日は日暮里駅西口から山茶花を低く咲かせた御殿坂をのぼり、石屋の角を左折、朝倉彫塑館を訪ねました。

入り口に男の裸像が立っているのも冬らしく思えます。

展示彫像もですが書庫もなかなか立派です。池をめぐる部屋や屋上でゆっくり冬日差を浴びます。

出ましたら、もう一度御殿坂を駅の方へ戻りセブンイレブンの角を右折してクランクになっている道を行きます。珊瑚樹の一本に幸田露伴旧居跡のプレートが。その先は先ほどの朝倉彫塑館の裏口です。竹のからり戸も風情があります。隣家の梔子の実もオレンジ色に残り日に映えています。彫塑館の屋根には胸を抱いた女性の裸像がのっています。

その道から墓域へとつながっています。

谷中墓地は都立谷中霊園と天王寺墓地、寛永寺徳川家墓地を含む広くひらけたところです。まわりに高い建物がなく、道路や家々に付かず離れずの明るい静かな一帯は坂を下れば根岸の子規庵へ、寛永寺を抜ければ国立博物館や科学博物館へ出られます。

冬空や猫塀づたひどこへもゆける 波多野爽波

桜並木や大きな樟もあり、小雀や鶴鴿、尉鶺、目白、尾長、雉鳩などもあります。

鳥の声を聴きながら一人で歩いている人とたまに擦れ違う静けさ。黙々と墓の仕事をしている人がいるので寂しすぎることはありません。

この数年で父母を相次いで亡くしましたときも、この墓域をよく歩いていました。どんな顔でいてもここはそういうところですから。

父の日といふ若き日を失ひし 綾部仁喜

石田郷子先生ご監修の最新刊『花と植物の俳句歳時記』は繙きやすく持って歩きたい本ですが、その中に「なにも特別なところに出かけなくてもいいのです。日々身を置いている環境の中でこそ、季語を見つけてほしいと願っています。」と先生のお言葉があります。

紫陽花の色をもらひし眼かな 石田郷子

これからも気持ちの落ち着くところを歩きどのようなときも大切に過ごしていきたいと思えます。